奈良大学情報ネットワーク元年を迎えて

情報処理センター所長　　中　川　寿　夫

奈良大学における学内ＬＡＮ（Local Area Network）の構築並びにインターネットへの接続は、平成７年10月１日をもって一応の完成をみた。この工事の完了をもって、本学の国際的情報ネットワーク社会への参加に関するハードウェア面での環境は一応整備されたことになり、おくればせながら本学も情報ネットワーク元年を迎えることが出来た。本学における情報環境整備の任の一端を支えるものとして、誠に喜びに耐えない。

しかしやっと出発点にたった現時点で、我々は喜んでばかりはいられない。今後解決していかなくてはならない問題は数多くまた多様である。ここでは残された課題のうち、情報社会の「光と影」に関する問題、及び加速化する情報ネットワーク社会とそれに対する本学のスタンスに関する問題の２点を取り上げて、今後の取り組みのための参考に供したい。

情報社会の光と影[1)]：情報社会は、コンピュータやマルチメディア機器を光ケーブル等の通信網で結節した、ハードウェアとしての情報ネットワーク基盤環境が構築された上で、そのネットワーク上にいかなる情報をいかなる形で提供し、また、それをいかに利用するかという、ソフトウェアとしての知的情報環境が整備されることによって始めて成立しうる社会である。

情報社会では何時でも、何処からでも、誰でも、直ちに必要な情報が入手できることを目指し、従って、この社会は情報という無形のものが高度の価値を有する社会である。その意味で、情報社会は「便利さ」に代表される光の部分とともに、情報というものの有する「もろさ」に代表される影の部分を持つことを見落としてはならない。加速化する情報社会のただ中にある我々として、まずその光の部分をいかにすれば享受できるのか、ということを考える必要がある。これは極言するなら人的環境の整備に尽きる。情報の受信、と同時に発信の基地となること、そのための能力の開発、そしてきちんとした、システムまでを含めた情報の管理能力の開発が何よりも望まれるところであろう。と同時に、大学という社会においては、影の部分にいかに対処していくか、ということを真剣に考えていかざるを得ない。情報倫理教育の必要とされるゆえんである。

１）例えば、社団法人私立大学情報教育協会編「情報倫理概論」1995年版、参照

加速化する情報社会とその中での本学のスタンスの確立：世界的な規模で加速化する情報ネットワーク社会への移行、また、日本における情報ネットワーク基盤の重点的整備状況を正確にとらえ、それに正しく対応していくことは、本学が将来にわたって大学としての機能を遂行していくためには何をおいても必要なことだと思われる。インターネットの普及につれてパソコンの売上げがテレビのそれを抜き去ろうとし、また、学生の就職情報さえインターネット経由でしか入手できないような状況が現に生じつつある現代日本社会。こうした社会の中へ学生を送り出すに当たって、本学としてはいかなる学生の育成方針を立てるべきであるのか。情報社会の光の部分を享受できる能力を開発することはもちろん、影の部分に加担しない人材を育成していくことは本学にとっての急務であるといわざるを得ない。

奈良大学情報ネットワーク元年を迎えた今、本学として将来に向かっていかなる問題をクリアしていかなくてはならないのか。情報環境整備、特に人的環境の整備の面に関して、２、３の基本的な問題点を指摘させていただき、今後の取り組みのための参考に供した次第である。